

## 「教職課程年報第4号」の発刊に寄せて

神戸女子大学・神戸女子短期大学  
学長 波田重熙

今年も「教職課程年報」が発刊される時期になりました。年報には、教員採用試験に関して日頃学生がお世話になっている教職支援センターの教職員や各学科の先生が、教職教育について常々お考えになっていることや学生への期待についてまとめてくださっています。また、教育実習に参加した学生の実習日誌、さらにセンターの活動記録がまとめられています。教員採用試験を目指す皆さんは、本年報を精読されて具体的な実行計画を立て、強い信念を持って希望実現に向けて邁進して頂きたいと思います。

これから教職を目指す皆さんにとくに求められるのは、地球的視野に立って行動するための資質能力、変化の時代に生きる社会人に求められる資質能力、それに今皆さんが大学で修得に努めておられる教員の職務から必然的に求められる資質能力だと思います。同時に、教師の仕事に対する強い情熱と、教育の専門家としての確かな力量や総合的な人間力を培うことが重要です。皆さん、希望の実現に向けてどうかベストを尽くして下さい。

政権が交代して以来、総選挙時に民主党のマニフェストにも示されていた「教員の養成課程は6年制（修士）とし、養成と研修の充実を図る」の実現に政府が強い意欲を示していることから、教育現場には大きな波紋が広がっています。まだ細かな制度設計は示されておらず、このように大きな改革によって新政権はどんな教育成果や人材育成を目指すのかの詳細も不明です。従って即断は避けるべきですが、現在の教育環境のまま教員養成6年化が実現することになると、本学の教育学科も少なからぬ打撃を被ることは間違いありません。それだけに、この問題への対応について、将来構想の中で十分に議論し、準備しておく必要があります。それにしても、急激な制度の改革を急ぐよりは、まず正規教員の数を増やして子供と向き合う時間を確保できる環境を整備することや、教員を雑務から解放するため、専務スタッフを増やすなどの対策を進めることの方が先であるという思いを拭きません。また、教員養成6年化により教職への入り口を強化するよりも、教育現場の経験を通して段階的にレベルアップを図るような、教師教育制度あるいは教員研修制度を構築する方がずっと教師力の育成に繋がるというのが、私の拙い教員経験からの実感です。

今年は兵庫県の教員採用試験結果が厳しかったようですが、そのような中でも、本学はまずまずの教員採用者数を達成しようとしています。これは学生自身の努力はもちろんですが、日々熱心に教職指導に当たって下さっているセンターの教職員や各学科の先生のお力が大きく、心から感謝申し上げます。平成21年度の行吉学園教職員表彰制度により、教職支援センターは「行吉学園理事長賞」を受賞されました。受賞理由は「多くの教職志望学生を支援するとともに、教員免許更新制度などへの取り組みが文部科学省から注視される等、教職支援体制の確立と推進に貢献した。」であり、教職支援センターが果たすべき役割は小さくないことが認められたということです。

今後とも活気溢れるセンターとなるように、呉々もよろしく願いいたします。